大阪信愛環境総合研究所
Osaka Shin-Ai Institute of Environmental Studies
OSIES News
人と環境
No.5
Apr. 2006

環境の時代を考える

大阪信愛女学院短期大学講師・中学部教頭　松田　潔

昆虫の世界から見た環境 ～なにわの虫の博物誌～

2年前の夏の昼下がり、一匹の黒い大形のアゲハチョウが梅田の「かっぱ横丁」の前を飛んでいた。このチョウは尾状突起を持たず、後翅が白く見えたので、ナガサキアゲハの雌ではないかと思った。その数日後、今度は阪急川西能勢口駅のプラットホームで、やはり黒いアゲハチョウが飛んでいた。やや小ぶりであったが、このチョウも尾状突起を持たないところからナガサキアゲハの雄と思われた。もしそうなら、以前は九州以南にしか分布していなかった南方系のアゲハチョウが、北上して東に分布を拡げ、私のような門外漢でも気がつくほど関西地方で普通なチョウになってしまったということだ。

そういえば少年の頃、大阪市内で夏に普通に見かけるセミは、ニイニイゼミとアブラゼミであった。その頃、クマゼミは珍しかった。このセミは大形で、体が黒く、透明の翅、緑色の翅脈を持っている。このようなクマゼミがセンダンの木やアオギリの幹にとまって、「ジャーン、ジャーン」という独特の大きな声で鳴くのを聞くと、捕虫網と虫かごをもった私たちは心をときめかしたものである。それが今や大阪市内のどの公園でも、夏になるとやかましいほどの鳴声でこのクマゼミが大合唱をする。クスノキやケヤキからナンキンハゼやヒマラヤスギまで木の種類を問わず、どの木にも鈴なりになっている。このセミも熱帯系の昆虫で、仲間が東南アジアに広く分布している。

このように身近な虫を観察しているだけでも、地球の温暖化が進んでいることがひしひしと実感される。私たちも可能な範囲で環境に優しい生活を心がけたいものである。

さて、夏の風物詩といえばホタルである。大阪は水の都といわれるので、ホタルが生息する絶好の環境のように思われる。しかし現実には大阪市内の河川は水質汚染が進み、水生昆虫であるホタルの幼虫の餌になるカワニナやモノアラガイなどの淡水産の巻貝も繁殖が難しい状態である。また、護岸工事によって土手がコンクリートで固められ、蛹化する場所がなくなった。街中も明るくホタルの雌雄が光の交信によって配偶行動をとることも難しくなっている。ただ、堺市の浄水場では下水を処理した水のなかでゲンジボタルが飼育され、季節になると近隣の人たちがホタル狩を楽しまれているようである。しかし大阪市や堺市内にホタルの生息する自然環境がまだ残っているのか、私は知らない。

子どもの頃、夏になると堺に住む伯父がゲンジボタルを虫かごに入れて持って来てくれたのを覚えている。戦前は船場の堀割にヘイケボタルが生息し、夏の宵、天満橋の料亭から淀川の支流である大川を眺めるとホタルが飛んでいるのを観賞できたようである。

以前、信愛中学の環境研究部の生徒が、寝屋川と城北川、大川の水質を比色計で調査したことがある。大川は他の2つの川と比べて水質が良かったので、もしかするとホタルが生息しているかもしれない。

池田の「人と自然の会」から出版された「池田市にすむ人里のホタル」という冊子を見ると、池田市内では、まだ広い地域にゲンジボタルとヘイケボタル，ヒメボタルが分布しているようである。会員の人たちはホタルの調査、観察会、飼育活動に熱心に取り組み、地域の環境保全活動にもたずさわっておられる。池田市の井口堂付近では、住宅地の水路に細々とした形でヘイケボタルが生息している。都市化の中で虫たちも生き延びるために精一杯の生活を続けているようだ。

ところで、旭区の城北公園にはアリスアトキリゴミムシという珍しい甲虫がいる。小形のオサムシの仲間で、公園内のアリの巣の近くで発見される。大阪市内ではおそらくここにだけに生息しているのだろう。生息環境の悪化でオオサカアオゴミムシのように市内ですでに絶滅した虫もいれば、ブタクサハムシのように近年北アメリカから入ってきて定着した虫もいる。時代とともに変化する環境の影響を受けて、大阪に棲む虫たちにも栄枯盛衰が見られる。最近校庭でメスグロヒョウモンチョウがよく見られるようになった。なぜだろうか、不思議だなという素朴な疑問を大切に、昆虫の世界を楽しみながら地球環境について考えることができたらと思う。

OSIES News 人と環境 No.5（2006）
大阪信愛環境総合研究所（OSIES）発行（2006年4月）
大阪信愛女学院短期大学鶴見学舎内（〒538-0053　大阪市鶴見区鶴見6-2-28）
TEL:06-6180-1041,FAX:06-6180-1045,E-mail:osies@osaka-shinai.ac.jp
Web page:http://www.osaka-shinai.ac.jp/osies/

Contents

P1　環境の時代を考える
P2　2005年度環境総研講座 高齢期の食生活を考える
P3　人と環境を考える
P4　自然観察から始まる自然保護